

特別支援学校における授業評価・改善の場を「学年」から「学部」へ広げることによる効果の一考察

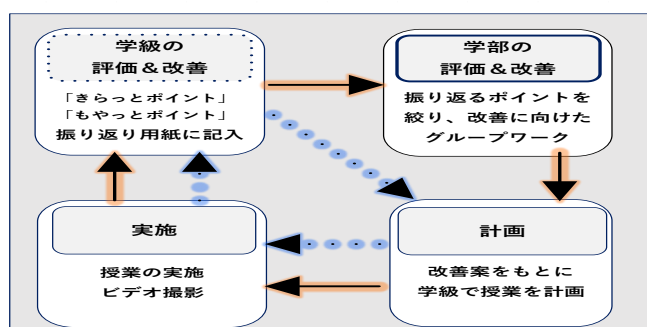
— チームで教育課程を考えるためのしかけのひとつとして —

神奈川県教育委員会支援部特別支援教育課教育指導グループ

堀田 亜依美

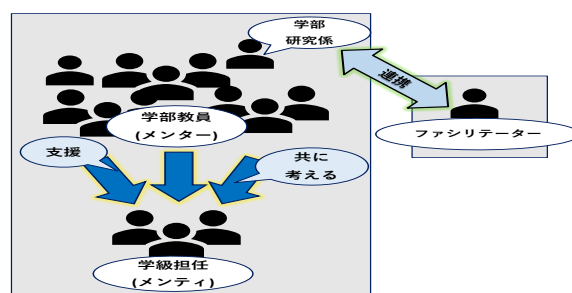
本研究では、学部における授業改善の場が主体的・協働的な場となるよう工夫改善すること、その結果授業改善が進むこと、さらに協働による授業づくりの取り組みがカリキュラム・マネジメントにつながるのだという教員の意識変化を起こすことを目的とした。カリキュラム・マネジメントを機能させるには、学校のビジョンを共通認識し、各教員が主体的・協働的に参画する組織文化が重要である。しかし、ビジョンの共通認識には至らずカリキュラムの実施部分である授業づくりにおいては、人材の不均衡などにより授業改善に行き詰まりが生じている現状がある。そこで、授業の主体である各学級での授業改善に加え、検討の場を学部全体に広げ、既存の環境を工夫すれば、実のある授業改善がなされるのではないかということを仮定した(第1図)。さらに、授業改善の成果から、カリキュラムの枠組みの中で授業を考えるワークを経て、各教員にカリキュラム・マネジメントに対する意識変化がもたらされるかを評価、考察した。

、出された改善案が次の授業に活かされたことや、児童の変容につながったこと等から多くの教員が授業改善の意義を実感することができたと考えられる。一方で、各学級で次の授業を計画する際に、改善案をどう活かしていくかという見極めの難しさや、検討の場を学部を広げると子どもの姿を十分に捉えられきれず、学級の課題からずれたという発言も見られた。授業改善のまとめにおいては、「継続性をもたせた教育をする」や「学習指導要領、教育課程編成表を参照する」必要性といった発言があった。発言をもとに各学年の年間指導計画を見比べたり、継続性を持たせた学びのデザインをしたりするワークを経ての感想からは、「キャリア教育の視点」への気づきと見られる記述が複数見られた。また、数名の教員からは、それぞれの視点で教育課程改善のアイデアが出されたことから、「カリキュラムのPDCAを主体的・協働的に機能させる」といった「カリキュラム・マネジメントに対する意識変化」が見られた。



第1図 授業検討の場の拡大

学部における授業改善では横浜市のメンターチームのシステムを参考に、対象学級担任をメンティ、それ以外の教員をメンターとし、毎回メンターとメンティが入れ替わる「交代制メンターチーム」を特徴としたグループワークを行った(第2図)。その結果、それぞれの経験から得たスキルを提供し合える環境を設定することで、主体的・協働的な活動が実現する可能性が見られた。そして



第2図 交代制メンターチーム

より良い授業づくりには、既存の環境を活かした柔軟な組織づくりが重要である。それを踏まえ、今後の課題として各学級はカリキュラム・マネジメントの視点で学級経営を考え、学部内ではカリキュラム・マネジメントの視点でカリキュラムを考えるという「つながり」を持つこと、学校全体においては、教員が主体的・協働的にカリキュラム・マネジメントに参画するには段階的、継続的な手立てを組織として構築することがあげられる。